



関与

同じ行為でも、
引き受けている深さは同じではない。

人は、何をしたかで語られる。

だが残るのは、
どこまで引き受けていたかである。

これは、能力の差ではない。
効率でも、成果の量でもない。

同じ資料を作り、
同じ場に出て、
同じ言葉を使っている、

そこに関与があるとは限らない。

関与は、作業量の中には現れない。

処理は終わる。
対応も整う。
対処も完了する。

だがそれらは、
出来事に触れているだけで、
その中には入っていない。

関与とは、
その帰結に自分が含まれること。

触れているとき、
人は「やった」で終わる。

引き受けたとき、
それは残る。

処理は必要である。
対応も、対処も不可欠である。

だがそれだけで場が構成される時、
そこには重心が生まれない。

関与している人は、
強く語らない。

ただ、外れない。



やった、は履歴。

引き受けた、は残り方。



Edition — 存在の芯
別景：関与

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026